

臨地実習と実践での違い

取り入れて頂きたい業務について

◎土川 珠空¹⁾
株式会社 中部パソロジー¹⁾

【はじめに】

今回、私が学生時代に行った病理検査に関わる臨地実習と実際の業務について、同期の意見も収集した。また現職場で役に立った内容と不足していた点について報告する。

【学生実習で経験（学内実習と臨地実習）】

- ・検体受付
臨地実習で担当技師より口頭での説明を受けた。
- ・切り出し
臨地実習で病理医が実際に臓器切り出しをしている現場を10分程度見学した。
- ・包埋
学内実習で1度、臨地実習では1時間見学した。
- ・薄切
学内実習で30分2枚、臨地実習で20分程度見学した。
- ・染色および鏡検
学内実習では病理組織標本が主で各種染色標本を鏡検し、臓器の見分け方を学んだ。
臨地実習では細胞診の標本も確認しスケッチなどを行った。
- ・診断業務
病理診断やレポートの閲覧に関しては学内、臨地実習ともに経験していない。
- ・解剖
学内実習で実際に解剖業務を経験し、また臨地実習では解剖の見学を行った。

【現職場での業務】

現在、3か月の時点では、切り出しから薄切までを主に先輩技師の指導の下に担当している。
切り出し：生検材料を主に行っており、コンタミや入れ違いに細心の注意を払っている。また、必要な情報を記入し、次の包埋が正確に出来るように配慮している。包埋：すべての検体が薄切時に最大面に出せるように留意し、皮膚面や粘膜面の方向を一定にしている。薄切：薄切室は単独で設置されており、温度や湿度により薄切切片の厚さが変わるので温度調整が重要であることを学んだ。各工程が動画で撮影されており、精度管理されている。

【考察】

臨地実習で得た解剖の経験は臓器の位置関係等を知る上で重要であった。また、様々な染色を経験したことで各染色の目的などが知識として残っていた。切り出しから薄切は、実習経験が乏しく、直ぐに業務に付く事が困難である。

【結語】

臨地実習で学術的な知識は得られたが、切り出しから薄切までの、実務的な業務を経験出来る機会があるべきと感じる。また解剖に関して教育施設や人により差があり、統一した実習が望まれると感じた。

株式会社 中部パソロジー 検査部 058-201-1750